第１４節

एतच्छुश्रूषतां विद्वन् सूत नोऽर्हसि भाषितुम् ।
कथा हरिकथोदर्काः सतां स्युः सदसि ध्रुवम् ॥ १४ ॥

etac chuśrūṣatāṁ vidvan
sūta no 'rhasi bhāṣitum
kathā hari-kathodarkāḥ
satāṁ syuḥ sadasi dhruvam

etat—この; *śuśrūṣatām*—聞きたがっている者たちの; *vidvan*—博識なる者よ; *sūta*—スータ・ゴースヴァーミー; *naḥ*—私たちに; *arhasi*—それをしてくださるように; *bhāṣitum*—それおを説明してください; *kathāḥ*—話題; *hari-kathā-udarkāḥ*—結果として主の話題になる; *satām*—献愛者たちの; *syuḥ*—〜になる; *sadasi*—〜の集まりの中で; *dhruvam*—確かに。

博識なるスータ・ゴースヴァーミー様よ。私たちはもっとそのことについて聞きたいと思っていますので、話をお続けください。それだけではありません。やがては主ハリについて語りあうことになる話題は、献愛者のあいだで交わすべきことだからです。

要旨解説

ルーパ・ゴースヴァーミー著『バクティ・ラサームリタ・シンドゥ』を引用したように、通俗なことでも、主シュリー・クリシュナへの奉仕に取り入れれば、結果は超越的なものになります。たとえば、『ラーマーヤナ』や『マハーバーラータ』といった叙事詩や史書は、知性に欠ける人々（女性、シュードラ、高貴な階級に生まれてもそれに値しない息子たち）のために書かれたものですが、ヴェーダ経典として受けいれられています。主の活動が収められているからです。『マハーバーラータ』は、４つのヴェーダ――サーマ、ヤジュル、リグ、アタルヴァ――が編纂されたあとの第５のヴェーダとされています。知性のない人たちは『マハーバーラータ』をヴェーダの部分にあたることを認めませんが、偉大な聖者や権威者たちはヴェーダの５番目の部分にあたるものとしています。『バガヴァッド・ギーター』も『マハーバーラータ』のなかに含まれており、知性の低い段階の人たちに授けた主の教えで満たされています。『バガヴァッド・ギーター』は世帯者のために

作られたものではない、と言う人たちもいますが、そういう愚かな人たちは『バガヴァッド・ギーター』がグリハスタ（家族を持つ人間）であるアルジュナに説明され、説明している主本人もグリハスタとしての職務をまっとうしていた、という事実を忘れています。ですから、『バガヴァッド・ギーター』はヴェーダの知恵という高尚な哲学が含まれていても、超越的な科学を学ぶ初心者のために用意されているのであり、『シュリーマド・バーガヴァタム』はその科学の大学卒業者と大学院生の段階にある、と言えます。『マハーバーラータ』、各『プラーナ』、他の経典は主の娯楽について満たされており、どれも超越的な経典で、偉大な献愛者のあつまりのなかで互いの強い信頼感をとおして話し合われるべきものです。

そこで問題になるのは、そのような経典が職業人に説明されると、崇高な内容がありきたりの歴史書や叙事詩に解釈されてしまう、という点にあります――じっさいに歴史的な事実や人物が登場するからです。だからこそこの節では、「ヴェーダ経典は献愛者のあつまりをとおして話し合われるべきものである」と言われているのです。献愛者による説明でなければ、高い段階にいる人々が味わうことはできません。結論として、主は非人格的存在ではない、と言えます。主は至高の人物であり、さまざまな活動を繰りひろげています。主は全生命体の筆頭者であり、みずからの意志で降誕し、みずからの力を使って堕落した魂を救います。このように、主は社会、政治、宗教の指導者のように行動します。その行動をとおして私たちは主の話題が聞けるのですから、たとえ初歩的であってもそのような話題はどれも超越的です。それが、人々の行動を精神化させる方法です。だれでも歴史、物語、フィクション、ドラマ、雑誌、新聞など、さまざまな俗な話題に聞きたがるものですから、それを主への崇高な奉仕と合致させればいいのであり、そうあってこそ献愛者が味わえる話題に変わっていきます。主に人格はない、活動もしない、名前も姿もなく、話もしない石ころである、と言いふらすことで、聞いた人を神論にし、信仰心のない悪魔的な人間にすることを助長しましたし、言いふらすかれら自身も主の崇高な活動から逸れていけばいくほど俗なことを没頭するようになり、結果として神のもとに帰るのではなく、地獄に堕ちていく道をみずから広げています（注１）。『シュリーマド・バーガヴァタム』はパーンダヴァ兄弟たちの歴史（必要とされていた政治・社会活動）から始まりますが、『パラマハンサ・サムヒター』（*Pāramahaṁsa-saṁhitā*）、すなわち頂点の超越主義者のためにあるヴェーダ経典と呼ばれ、パラン・ギャーナ（*paraṁ jñānam*）「最高の超越的知識」について説いています。主の純粋な献愛者たちは、牛乳と水が混ざっても牛乳だけを吸いだせる白鳥たちにたとえられるパラマハンサばかりです。

（注１）5000年前でさえ、インドの社会では、市民が主の活動にかかわりのない本は一切読まないよう配慮されていました。主に関係のない祭典や儀式も執行されず、主の娯楽ゆえに神聖かつ浄化された場所以外を訪ねることもありませんでした。ですから、村に住む一般人たちでさえ、『ラーマーヤナ』、『マハーバーラータ』、『バガヴァッド・ギーター』、『シュリーマド・バーガヴァタム』について、幼いころから話していました。しかしカリ時代の影響で、人々は犬や豚の文化に転落し、超越的な知識など無視してただ食べ物のためにあくせく働くようになってしまったのです。